

土岐千尋展 展覧会見学会と講演会

開催日 2013年8月31日(土)午後2時から5時まで

※展覧会は7月26日(金)から9月23日(月)まで

会場 下諏訪町 諏訪湖博物館

講演会「木と漆と師・黒田辰秋を語る」土岐千尋氏

聞き手 谷進一郎氏

参加者数100名(木工会会員12名)

報告者 大橋 博文

開演2時ぎりぎりに着いてしまったこともあり、駐車場は満杯。裏側にもスペース有りということでなんとか停めて走って会場へ。会場は補助椅子も出ていて、こちらも満杯。すでに公演は少し始まっていた。

講演では土岐さんが木工を始められたきっかけ、黒田辰秋への弟子入りの思い出。その後の作品作りの道のりなどのお話があり、途中、谷さんのご尽力により黒田辰秋のDVD鑑賞などがあった。

私は恥ずかしながら作品を観せていただくのは今回初めてであり、その印象などを語るには準備不足ですので、まずは配られたパンフレットより宮坂徹館長のお言葉と土岐さんのごあいさつの文章をそのままコピーいたします。

「はじめに」 館長 宮坂徹氏

人間国宝に認定された黒田辰秋に師事した作家が諏訪にいて、その作品が見られるので一度見てみないかと紹介され、松本の展示会にでかけたのが土岐さんの作品との出会いでした。

そのときの印象は、木目が波のような文様にうねる不思議な「オブジェ」のようでした。じつはそれはオブジェではなく「箱」だったのです。この見事に研ぎ出された木目は、摺漆(拭漆)という伝統工芸技法によることをしたのは後のことです。

経歴を伺うと、武蔵野美術大学産業デザイン科を卒業してからデザイナーとしての感覚から生まれる無限の曲線構成は、箱というフォルムのなかにとどまることを知らない連続性を想像させる。そして、流れるような曲線と、それを断ち切るようなエッジとの組み合わせは、時に緩やかに時に激しく奏でられる、良質な音楽を聴いているようである。各一箇の作品からメロディーが流れてくるのである。

師の元で伝統工芸技法を学び、ものを作り出す精神を学び、なによりも「黒田辰秋という類稀な作家の至宝に触れた時間が最大の宝」だという土岐千尋が生み出す作品は、伝統的な工芸技法を生かした芸術活動ということでしょう。

「箱」とは思えない箱にこだわり。箱をアートする土岐千尋の箱の世界をお楽しみください

館長 宮坂 徹

ごあいさつ

私が木工にたずさわってから40年にならんとしています。

独立当初は家具類など木工全般を手がけていました。ある時唐突に「なぜ箱は四角なものばかりなのだろう」(四角にはそれなりの理由があるのですが)という思いにとらわれました。好きな木工の世界に入りながらどこかしっくりしないものを感じていた私の中で、グラフィックデザイナーだった頃の自分とその職を捨てて選んだ伝統工芸の世界がなんの違和感もなくしっくりとリンクした瞬間でした。それ以来、箱に魅せられ今日にいたっております。

師であった黒田辰秋先生が「自分のおはこを作りなさい。これが自分だというもの」という言葉が今も頭に浮かんできます。「これが自分だという物」を求めてこれからも作り続けようと思っております。

諏訪の平で独立した私ですが、この地で展覧会を開くのは初めてです。機会を作ってくださいました皆様に感謝申し上げます。

2013年 土岐 千尋

プロフィール

1948 宮城県に生まれる

1971 武蔵野美術大学で学び 木漆工芸家 黒田辰秋に師事

1990 英国ビクトリア&アルバートミュージアム、櫛拭漆大箱買い上げ
各地で個展・二人展 グループ展参加

<講演会で印象に残った話>

- ・最初は木にこだわっていたわけではなく、なんでも良かった。
- ・松本民芸館などを見学して、建物の梁の木の魅力に惹かれて、木でものを作ろうと思った。
- ・それならと黒田辰秋の弟子入りを勧められて、最初は尻込みしたが雑誌(銀花1972年)で辰秋の作品を見て決心した。
- ・3年の弟子の間、漆の仕事が主で、木地の仕事は、ほとんどなかった。辰秋晩年であったこともあり、3年でおいとました感じ。
- ・その後、飯田の家具屋や、諏訪の建具屋さんで少し修業やアルバイト(すでに、技はかなり身に付けられていた様子)された。
- ・辰秋の存在が余りに大きく、お弟子さんたちは、辰秋から出れない、越えられない壁と苦勞されていた中、土岐さんはグラフィックデザイナーだったら何ができるか?という新たな

観点から、厚めの指物で組んで刳物で造形する箱作りに挑んだ。

- ・売れる売れないは気にせず、作りたいものを作る。
- ・自然界に存在する形を拝借して、私が表現しているだけ
- ・オブジェではなくあくまで工芸にこだわった。

「土岐さんは良き理解者がいて、幸せですね。」という質問に「はい、幸せです」と喜んでおられた。

土岐さんが辰秋の印象を語っておられた中で

「切り出しの使い方が、すごかった。弟子たちが同じような形で彫るのだが、出来が全然違う。とてもかなわないという印象。「鉋は機械だと。ほんとうに手工具なのは切り出しだ」というようなことをおっしゃっていたとのこと」

手工具の代表の鉋を機械といってしまうほど、切り出しが体の一部になっておられたということと解釈しましたが・・・

<感想>

- ・自分のおはこのものをつくりなさいという辰秋の問いに「はこ」で勝負されたのが超・洒落ている。
- ・日頃、時間や予算に追われて製作している自分にとって、もの作りの原点を考えさせられた。このままでいいのだろうか。これからどこに向かっていくのだろうかと人生そのものも考えさせられた。土岐さん、博物館のみなさま、お世話にいただいた谷さん、ありがとうございました。

<写真> (公演終了後、展示室にて 撮影者大橋)



以上